

再来日した元交換留学生のライフストーリー —支援される側から支援する側へ—

八若 壽美子*

(2019年10月28日受理)

Life Story Interviews of Former Exchange Students Who Returned to Japan: From Being Recipients of Support to Being Supporters

Sumiko HACHIWAKA*

(Received October 28, 2019)

Abstract

In this study, life story interviews were conducted with two former international exchange students who had studied at a regional university in Japan for one year, and who returned to Japan after graduating from university. One of them returned because her spouse became an international student in Japan, while the other did so because she married a Japanese. An analysis was performed based on the interviews. It focused on how the former exchange students evaluated their experiences while studying abroad, and whether there were any connections between those experiences and their present lives. The findings of the analysis are as follows. First, while studying abroad, with regard to such matters as balancing study and part-time work, the former exchange students felt that self-management was somewhat difficult. Second, they felt that working part-time helped them to learn about Japanese society and how to interact with the Japanese, and led them to become more responsible. They attested that they continued to benefit from their experiences in their present lives. Third, the former exchange students positively evaluated their experiences of studying abroad as opportunities to attempt new challenges that successively enabled them to change for the better and grow as individuals. Fourth, after returning to Japan, the former exchange students, using their experiences of studying abroad in Japan and their Japanese language abilities, became supporters of their compatriots living in Japan.

【キーワード】 ライフストーリー、留学評価、元交換留学生、再来日、支援者

*茨城大学全学教育機構 (〒310-8512 水戸市文京 2-1-1 ; Institute for Liberal Arts Education, Ibaraki University, 2-1-1 Bunkyo Mito-shi 310-8512 Japan)

1. はじめに

近年、日本語教育においては、個々の経験や内的世界に光をあてるライフストーリー研究¹⁾が注目され、日本語を学ぶことが人生においてどのような意義や影響を持つか、個々の語りを通時的、動態的に分析することによって、言語教育の意義を捉え直そうとする試み(川上2011、三代2009、2015)がなされている。本研究は、ライフストーリー研究の手法で、個々の元留学生が留学経験をどのように捉え、留学経験がその後の人生にどのような影響を与えたかを探ると同時に、留学中の学修や人間関係構築に大きな役割を果たす日本語習得と留学評価との関連を解明しようとする一連の研究の一部である。

一連の研究では、大学院生などの正規留学生(池田・八若2016、2017、池田2018)だけでなく、交換留学生など約1年間の短期留学の評価を取り上げ、短期間の留学であっても留学における経験は元留学生の人生に強いインパクトを与える意義深い経験であることを示している。

八若(2018)は、地方大学に交換留学をし、大学卒業後母国で働くインドネシア人元留学生3名のライフストーリー・インタビューを分析した。その結果、日本語専攻の3名にとって、交換留学は日本語の上達だけでなく、自信を得、視野を広げ、現在の仕事にも繋がる経験として高く評価され、さらに大学院留学という次のステップへの動機を提供する場にもなっていることが判明した。

池田(2019)は、自国の大学卒業後に日本で英語教育に携わっている元交換留学生を対象にライフストーリー・インタビューを行った。留学中は、日本語能力の高い留学生の中で日本語に対し劣等感もあったが、サークル活動や家庭教師などの授業外での交流を通して自信を得、再来日後の職場や地域等での良好な人間関係の構築に日本語が寄与していることを明らかにした。また、英語教育者として生徒たちに留学のすばらしさを伝えたいと考えていることも判明した。

八若(2019)は、地方大学に約1年間留学し、大学卒業後配偶者の仕事の関係で来日し家族と共に日本で生活する元留学生2名のライフストーリーを分析した。その結果、留学が自己成長する場であること、留学経験で得た日本社会や文化に関する知識と理解は再来日後の生活に活かされていること、結婚、出産や育児によって勉学やキャリアを中断・縮小する選択をしても、勉学への意欲と学んだことを広く社会に還元したいという意志を持ち続けていることなどが明らかになった。

以上のように、約1年という短い期間であっても、留学はその後の人生に大きな影響を与えるものとして高く評価されている。就職や大学院進学だけでなく、家族の事情など様々な理由で再来日する元交換留学生は多い。本研究では、引き続き日本語専攻で日本の地方大学に約1年間の交換留学をし、再来日した2名の元交換留学生の留学評価を取り上げる。再来日の理由は配偶者の日本留学及び日本人との結婚で、八若(2019)の協力者と同様に自分自身の意志だけでは人生の選択や決定がしにくい環境にある。2名のライフストーリー・インタビューをもとに、(1)日本留学に対する評価、(2)留学と現在の生活との関連の2点に焦点をあてて分析した。

2. 研究方法

2019年3月、8月に、元交換留学生2名にそれぞれライフストーリー・インタビューを行った。2名は東南アジアの大学で日本語を専攻し、大学間協定のある日本の地方大学C大学に約1年間の交換留学をした。出身国の大学の課程を終え、それぞれ、配偶者の日本留学、日本人との結婚を機に再来日した。インタビュー調査の依頼時に、「留学する前から現在に至るまでの生活やその時に考えていたことについて話してもらいたい」という教示と大まかなインタビュー項目²⁾を伝え、

インタビューでは必要に応じて調査者が質問を加えながら自由に話してもらった。インタビューは協力者の了解のもと、ICレコーダーに録音し、文字化した。インタビューの内容の中から、上述の2点に関わる言及を中心に抽出し、時系列にまとめた。紙幅の関係上、協力者の言葉をそのまま掲載する会話形式と引用を交えた要約の形式³⁾とを併用した。また、フィラーや言い間違いは省略した。最小限ではあるが理解に支障があると思われる間違いはインタビュー協力者の了解のもと修正した。また、個人や場所が特定されるような固有名詞は一般名詞や記号にした。

3. 語りと考察

本章では、各インタビュー協力者について、略歴を示し、その語りを「日本語学習及び留学のきっかけ」「留学中の生活」「人間関係」「留学生としての学修」「留学後の生活」「留学を振り返って」の項目に分けて具体的なエピソードを交えて提示した上で、それぞれの留学評価、留学と現在の生活との関連について述べたい。

3.1.1. インタビュー協力者 A さんの略歴

協力者 A さんは、出身国の大学の日本語教育学科4年次に交換留学生として約1年間C大学に留学した。出身国の大学卒業後、出身国の塾で約半年間日本語を教え、日本の大学院に留学する夫とともに来日した。来日後はF市で主婦として生活する傍ら、科目等履修生として日本語や専門科目を勉強するほか、ボランティアでF市在住の同国出身者に日本語を教えたり、その子どもの学習支援を行う活動をしったりしている。調査時の1か月後に出産予定であった。

3.1.2. A さんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

A さんが日本語に興味を持ったきっかけは出身国で連日放送されていた漫画やアニメで、そこで描かれる風景や文化に関心を持った。高校で3年間日本語を学び、教師になりたいという希望があったため、出身地の大学の日本語教育学科に進学した。高校の時は日本語は英語に比べてやさしいと思っていたが、大学で勉強すればするほど難しく感じるようになり、教師になるのは難しいとさえ思うようになった。

しかし、日本が好きで「憧れ」であったため、行くチャンスがあれば行きたいと思っていた。C大学への交換留学前にも1か月のインターンシップや約2週間の短期研修プログラムなどで来日しており、どの大学でもいいのでより長期の留学に挑戦してみたいという気持ちがあった。

交換留学の前年にC大学の学生と地域ボランティアがAさんの出身校を訪問しており、そこで友達となった学生と日本で「会いましょう」という「夢の話」が「交換留学」という形で叶うことになった。

《留学中の生活》

留学前は自分の日本語能力で生活できるか不安だった。また、奨学金がなかったため、アルバイトができるか、アルバイト代で生活できるかが心配だった。

来日経験もあったので、留学当初困ったことは経済面だけだった。自国とは格差があるためアルバイトは不可欠だった。アプリや電話でバイト先を探したが、イスラム教徒の女性が頭髪を隠すため着用するヒジャブを被っていることなど宗教上の問題もあってなかなか決まらず、結局先輩留学生が働いていた居酒屋でアルバイトをすることとなった。主として厨房での仕事であったが、それ

まで調理経験がなかったため店長から厳しく指導されながら徐々にシフトを増やし、留学終了時まで続けた。アルバイトを通して、自国とは異なる点も多く感じた。

A： 私も一回、自分の国でバイトしたことがあるんですよ、ホールで。大変なのは、やっぱり日本だと、バイトしながら同僚と話すとか、あまりよくない。そして、もし仕事がない時にも何かしてる。

*：⁴⁾ ふりをする。

A： 盛り付けとかも。(中略) 盛り付けの時もきれいじゃないとダメ。

結果的にはこのアルバイト経験が日本社会や日本人との接触の仕方などを知る上でも、現在の主婦としての生活にもためになったと思う。

さらに、経済的な不安から日本語学校が A さんの出身校の学生を受け入れる短期プログラムの通訳・翻訳のアルバイトも引き受けた。自分の日本語能力を高めるためにいいという考えもあった。

アルバイトを通して感じたことは「自己管理の難しさ」である。

A： 私の考えが甘かったんですよ。なんとかなるかなって思ったんですけど、いや、難しいですね、バイトをしながら勉強するというのは。

アルバイトと勉学との両立は予想以上に難しかった。

《留学生としての学修》

留学生向けの「日本語」の授業は C 大学では最も上級のクラスで難しかったが、ついていけた。チャレンジしたいという気持ちもあって、日本人向けの専門科目も面白そうなものを履修してみたが、専門用語が多くあり、聞き取れないことも何度もあった。授業の最後に書くコメントシートなど、日本人向けの授業をとったからこそ分かった違いもあった。また、思っていたのとは異なる光景にも遭遇した。

A： 最初に思っちゃったのは、日本人ってすごい勤勉で、まじめという偏見の気持ちがあったんですけど、実際に大学で授業をとったら、寝ている学生がいっぱいいて、びっくりしました。すごいショックで。自分の国で見たことない風景というか。

*： そうなんだ。

A： はい。たぶん自分の国で、それがあったら、すぐ怒られる。(中略) そして、国の学生と比べると、私の国の学生ってすごい積極的。

*： ああ、そうですね。はいはい。

A： でも、日本人の学生はたぶん恥ずかしがりやかもしれないので、意見をあんまり言わない。だから、私、意見言いたかったんですけど、

*： 遠慮したの？

A： そうそう。周りを見て。でも、手をあげなかった。

*： そうなんだ。

A： なんかせらそうに見えるかな、もし手をあげたら。

このように、周りを観察しつつ、自己の行動を調整することもあった。

日本語の上達は、専門科目で苦勞していたこともあり、自分ではあまり実感できなかった。日常

会話と専門分野の学修で使われる日本語の差を感じた。

《人間関係》

来日前 C 大学からの訪問団の学生と友達に短期間でなれたので、すぐ日本人の友達ができると思っていた。

A：（訪問団の）⁵⁾ みんなと仲良くできたので、日本人ってすぐ仲良くなれると思いきょんじゃって、実際ちょっと距離を縮めるのは、人それぞれなんですけど、時間がかかる。

また、アルバイトで時間的な余裕がなかったこともあるが、宗教上のこともあって、友人たちと行動を共にできないこともあった。

A： 最初に思ったのは、宗教と文化。異文化はそんなに問題ないかなと思ったんですけど、実際に日本人の友達にどっかで誘われたりすると、いやあ飲み会行けないな、アルコールも飲めないな、あそこは遊べないとか、お祈りの時間もありますし、それはちょっと残念で。

*： そうだね。一緒には遊べない。

A： 私もけっこうちょっと厳しいので、食べ物、肉とか。だから遠慮しちゃう。もし誘われたら、A さん何食べるとか。メニューに載っていないことを必ず店員さんに聞かないと。だから、もし迷惑かけたらどうかと思って、あまり。

*： 誘われても。

A： だから、断るばかり。

特に、飲酒については嫌な思いもあった。

A： 若者だと、クリスマスとか、バレンタインとか、みんなよく飲むんじゃないですか。

*： そうそうそう。日本人の学生。

A： だから、私ちょっとそれが嫌で。

*： なるほど。そういうのがちょっといろんな人と仲良くなるのに、障害だったかもしれないですね。

A： よっぽらってる人も一度も見なかったもので、C 大に来て、すごくショックで、怖かったんですね。

多くの日本人の友人を作ることは難しかったが、チューターにも恵まれ、多くはないが良好な友人関係を築いていった。指導教員との関係も良く、履修した授業も面白かった。指導教員とチューターとともに遠出をすることもあった。チューターは帰国後友人とともに A さんの国に遊びに来るなど、現在も交友が続いている。

様々な国からの留学生とも寮生活やアルバイトなどを通して友達になった。特に、イスラム圏出身の学部留学生達にはハラル肉の購入に車で業務用スーパーに連れて行ってもらうなど、行動を共にすることが多かった。

また、C 大学のある D 市の民間の人々にもお世話になった。特に、大学近隣に住む老婦人宅へはよく遊びに行き、ご馳走にもなった。

A： なんか辛い時に、その人たちに励ましてもらいました。なんか親代わりみたいな感じです。

また、出身国と交流がある C 大学の元教員にもお世話になり、大きな影響を受けた。

A：一週間に一回くらい、先生のおうちに行ったんですよ。で、そこでいろいろやって、勉強してて、いろいろ怒られまして。例えば、時間のこと。日本人は絶対遅刻しないとか。もし来なかったら、連絡しないとだめ。日本人にとって常識のことを教えてくれました。

このように、多様な人々との関わりを持ち、様々な形で支えられながらの留學生活であった。しかし、期待とは異なる点も観察された。

A：学部の事務ってちょっとですね。(中略)それは、期待はしてたんですよ、最初は。インターンシップの時、私、東京ディズニーランドでインターンシップしてたんですよ。おもてなしのこととか、学んだ。すごいですね、日本のおもてなしって。そのおもてなしじゃないって感じ。

所属学部の事務職員の対応は厳しく事務的に感じられ、期待とは違っていた。

《留學後から再来日まで》

帰国後卒業論文を提出して6か月後に卒業し、その年の12月に結婚した。結婚時には夫が奨学金を得て日本に留學することが決まっていた。翌4月に夫が来日し、5月にAさんも再来日した。卒業が決まった6月ごろから数か月、出身地の塾で日本語を教えた。高校で教えるという選択もあったが、塾で子どもからお年寄りまで様々な人を教えるのは楽しく、面白かった。

A：塾だったら、いろんなレベルが教えられますし、私、その時N2持っているので、N3からN5まで教えられます。プライベートのクラスも教えられますし。

塾のオーナーは日本人で、再来日後F市まで会いに来てくれたりした。時給も高校より高いので、帰国したらまたこの塾で教えたいという希望もある。

《再来日後の生活》

再来日後約半年の主婦としての生活はバイトもせず勉強もせず退屈だった。半年後に夫の在籍する大学の科目等履修生となり、日本語と専門科目の授業を履修した。1年ぐらい日本語は勉強していなかったため心配していたが、プレイスメントテストの結果最も上級のクラスになった。専門科目も以前より問題なく理解できたが、妊娠したため次の学期は継続しなかった。

また、夫が在籍する大学には多くの同国人とその家族がおり、主として同国人の主婦に対してボランティアで日本語を教えた。日本語ができない彼らは何かとAさんを頼ることが多く、その解決策として彼らが日本語を覚え、人を頼らず自分の力で動けるようにしたいと思ったからだ。

A：やっぱりみんな退屈ですよ。日本では近所の人とかも日本人なので、だれも知らないし、かわいそうですよ、ほんとに。ひきこもる主婦もいる。ストレスがたまって、結局帰国しちゃったみたいなの。

*：そっか。

A：旦那さんは、理系の人は忙しいでしょ。

*：そ、忙しい。ずっと実験とか。

A：そうそう。だから、話す相手がなくて。ずっと友達といるのもね。

*：同国人コミュニティーだったら、ちっちゃいから、それも気、遣うよね、なんとなく。

A：この機会(日本語教室)があったら、みんな仲良くできて、会話もできる。情報収集もできるし。

*： すばらしい。

A： 私も楽しい。幸せになれるから。

Aさんは一人一人のニーズに合わせて教材を作るなどの工夫をし、それが自分自身の宝物となっているという。出産が近づいたので日本語教室はやめたが、自分のブログで自作の日本語教材を公開している。

さらに、大学のプログラムで、先生に頼まれて、同国出身の子供たちに母語を教えたり、教科の学習支援を行ったりしている。これらの活動を通して、同国人から頼られる存在となった。

しかし、Aさんは交換留学で日本人との接触の仕方を学んだが、現在の状況は同国人との接触について逆カルチャーショックを受けている感覚だという。

A： 日本人と付き合っ、だんだん、同国人と付き合うのが苦手になってくるんです。日本人はすごく気を遣うじゃないですか。私の国の人、逆にマイペースで自己中心とか。だから大変でした。

以上のように、再来日後は自分の日本語能力を活かし、同国人への支援する立場になり、頼られつつも自分自身の認識の変化も感じている。

《留学を振り返って》

最後に、交換留学をどう評価するかを聞いた。

A： すごい、私の人生で、一番大きい影響かな。

*： けっこうインパクトが。

A： インパクトがすごくあるんですね。私も日本に来る前に一番気づいたのは、私の性格、すごく悪かったんですが、自己中心で、思いやりもないし。だから、日本と接触して、留学して、どう説明するかな？ 私、イスラム教徒なんですけど、日本に来て、また、イスラム教徒になれるって感じ。なんか丸くなる。

*： はあ。ほんとうのイスラム教徒になる。

A： なった気がする。食べ物に関して、昔はそんなに意識はなかったんですけど、日本に来て、ハラールとか意識しましたね。人との接触とかも。日本人とだけじゃなく、いろんな人とか。日本人って人のことをすごく気にする。

*： そうかもしれない。

A： だからすごく気を遣う。それはいいことで。私はそれがないところだったんですよ。だから、学んですごくいい人間になれるかな。

留学中にやりたいことはやりきったという感じがある。

A： すべて感謝する。最初は奨学金があればよかったかなと思ったんですけど、奨学金をもらったら、たぶんはバイトしないかな。性格もまだそのままかもしれないです。

*： やっぱり苦労したから。

A： 苦労したからこそ、勉強になる。新しい自分になれる。

*： 苦労はお金を払ってでもやらないといけないってこと。

A： ですね。苦労なんですけど、逆に考えると、一番必要、私にとっては。

苦勞もあったが、苦勞したからこそ留学は「新しい自分」になるような大きな影響のある体験であった。

《将来の展望》

アルバイト経験が現在の生活に役にたっていると前述したが、逆に知っているからこそ「日本企業では働きたくない」という気持ちもある。結婚していなかったら働いたかもしれないが、子育てしながら働くことが日本ではシステマ的に難しいと感じるからだ。出身国では、どんな仕事であれ、職場に子供を連れて行ってもかまわないという環境がある。

これから数年は子育てが中心であろう。進学したいと思っていたが、それは大学の教員になりたかったからで、今その気持ちはあまり強くない。心待ちにしていた子どもができることが一番うれしいことなので、その後のことはまだわからないというのが現在の気持ちである。ただ、卒業後の経験から「教える」ことが好きだということはわかったので、チャンスがあれば日本語を教えたいと思っている。

3.1.3. Aさんの語りのまとめ

日本が好きで交換留学前に2度の来日経験のあるAさんにとっては留学当初の不安は経済面のみだった。奨学金を得られなかったため、経済的な不安から居酒屋で留学終了時までアルバイトをするのに加え、一時期は日本語学校の通訳・翻訳のアルバイトをするという多忙さであった。アルバイトと勉学の両立は大変で、「なんとかなる」という考えの甘さと自己管理の難しさを痛感した。

しかし、結果的にはこのアルバイト経験が日本社会や日本人との接触の仕方を知り、責任感を身につけ、現在の主婦としての生活にも役立つ経験となった。

Aさんは1年間の留学を振り返って、やりたいことはやり切り、「すべてに感謝」と述べている。最初は奨学金があればよかったと思ったが、奨学金をもらったら、バイトもせず性格もまだそのままかもしれない。苦勞したからこそ、勉強になり、留学前いやだと感じていた自分の性格が変わり、「思いやり」の気持ちを持てるようになった。留学は自己成長の場であり、「新しい自分」になる体験であった。

再来日後主婦として生活していたが、日本語ができない同国人たちに頼られ、彼らが日本でより生活しやすくなるように、日本語を教えるボランティアを始めた。自分自身の日本語能力や留学経験を活かし、同国人たちを支援する側となったのだ。この体験を通して、自分自身も教えることが楽しいと再認識した。しかし、同国人との接触は、逆カルチャーショックを感じる体験でもあり、留学を通して自分自身が変化したことを認識する場ともなった。

日本語を教えるということに対しては心の揺れがあった。日本語を勉強し始めた高校生のころには日本語教師になりたいと思っていた。しかし、大学で日本語を勉強するにつれて、その難しさに気づき、教師になることは難しいと思うようになるが、卒業後塾で教えてみると、様々な人々に教える楽しさを知った。再来日後日本で日本語ができない同国人にボランティアで教える際個々のニーズに合わせて教材を作った経験が、今宝物になっているという。出産のため、日本語教室はやめてしまったが、今は機会があれば何等かの形で教えたいという気持ちを持っている。

Aさんの語りには節々に分析的な聡明さが感じられる。Aさんは自分自身の意思だけでは決定できない事態に、その時その場所で何ができるかを考え、判断し、自ら新しい世界を切り開いている。また、「憧れ」の日本であっても、日本人学生の学習態度や日本での就業環境など、批判的に見るべきところは適格に指摘し、自分自身がどう対処するか判断している。

心待ちにしていた子どもなので、当面は子育て中心の生活になる。今後のことは家族の状況など、現時点では不確定な部分が多い。しかし、Aさんは置かれた状況でしっかり最善の方法を選びとっていこうことが予想される語りであった。

3.2.1. インタビュー協力者Bさんの略歴

協力者Bさんは、出身国の大学の日本語学科3年次に交換留学生として約1年間C大学に留学した。帰国後出身国の大学で1年間勉強した後卒業した。卒業後に日本人との結婚が決まったため、出身国では就職せず、再来日までの約1年間自営業を営む実家の手伝いをしながら、日本語の個人教授などをした。来日前に現所属先である専門学校の仕事が婚約者の紹介で決まった。12月に結婚し、翌4月から専門学校での仕事を開始し、調査時には約1年が経過していた。

3.2.2. Bさんの語り

《日本語学習及び留学のきっかけ》

高校では理系コースであったが、理系はあまり得意ではなく、科目としては英語が好きだった。英語は既にコミュニケーションがとれる程度にできたので、英語以外の言語を勉強したいと思い、大学では日本語を専攻することにした。また、出身国の給料は高くないが、日本語ができれば日系企業はベースが少し良いため、就職に有利だと考えた。

大学では日本語未修者向けのビジネス日本語学科に入った。自国での大学生活は勉強ばかりでつまらないと感じていたため、機会があれば外国で一度一人暮らしをしてみたいと思っていた。日本語を勉強していたので、日本で交換留学のできる大学の中から履修科目、寮などの条件を見て、C大学に留学することにした。一緒に留学する同学科の友人もいたので安心感もあった。

《留学中の生活》

留学当初は慣れないこともいろいろあったが、自分にとっては習慣などは問題ではなく、困ったことはあまりなかった。たいていのことは便利な「テクノロジー」で解決できた。

留学前に考えていたことと違っていたのは自分自身の姿勢だった。留学前は、勉強を頑張ろうという気持ちだったのに、来日後やる気がなくなった。その理由はいくまで「個人的」な問題だとし、次のように述べている。

B： 留学して、毎日自分の生活、一人暮らししていますので、いろんなことを守らないと。時間も守らないと。

*： 初めての一人暮らし？

B： 責任、勉強の責任も守らなくてはなりません。でも、そんなによくできなかった。

*： できなかった。自分の生活の管理がうまくいかなかった。

しかし、留学生活は楽しかった。留学生寮の近くの飲食店でアルバイトを見つけ、来日2か月後から働き始めた。自国では時給が安いのでアルバイト経験がなく、初めてのアルバイトだった。

B： 日本に来て、自分でバイトやってみて、よかったです。

アルバイトでは、材料の準備、掃除、注文、会計など全般をこなし、初めて得たアルバイト料に喜びを感じた。

B： 疲れましたが、お金もらった時、うれしかったです。

最初は大変で注文などを間違っただけでもあったが、一回間違ったら「次は間違わないように」注意して徐々に慣れていった。店長との関係も良好で、現在も連絡を取り合っている。夫とは店長の紹介で知り合った。ここでのアルバイトを留学終了時まで続けた。

《留学生としての学修》

前述したように、留学前に持っていた「頑張ろう」という意欲は、来日後失われた。その要因は、先生でもなく、アルバイトの疲れでもなく、「自分の問題」であるという。初めての一人暮らしで、多くの責任が生じたが、うまく自己管理できず、遅刻や欠席をした。

B： 私は、留学の生活が終わって、留学した時のことを考えて、私は悪い学生だったと。

学習態度は自分でもよいとは言えなかったが、自身の日本語については、表現、漢字などは思ったほど上達しなかった反面、聞いたり話したりすることには上達を感じた。上達を一番実感したのは「発表」の時である。

B： 自分で全部考えて書いて、話して。最初は難しいな、できると思わなかったんですけど。

「発表」では自分で全過程を主体的にやったことへの達成感が感じられた。

《人間関係》

自分自身の性格は明るくなく、人間関係をつくるのはあまり得意ではない。しかし、せっかく日本に来たのだから、友達もつくり、いろいろな活動に参加したいという気持ちはあった。

B： 自分が（精神的に快適だと感じる）comfort zone を出て、いろんな人に会って、話すのが、ちょっと怖い人がいます。

*： ちょっとエネルギーがいるってこと？

B： エネルギーです。でも、その人たちは自分のところだけにいたいと思うわけではなくて、簡単なことではないです。だから、エネルギーを使います。

*： 普通の人に比べて？

B： 態度、自分の態度を変えるのは大切だと思います。他の留学生は世界中から来ますから。自分の国だけではない。いろんな習慣、いろんな言語、自分の態度はとても大切だと思います。

人間関係を構築するのは得意ではないと思っていたが、態度の変化のおかげか、期待以上に世界中からの友人ができた。また、留学生寮のチューターをはじめ、日本人の友人もできた。その理由の一つとして留学生寮のチューターがある。

B： C大の留学生を助けるシステムはとてもいいと思います。他の大学には、それはありません。

*： あ、そうですか。例えば、どんな？

B： チューターはいても、留学生と一緒に生活するわけではありません。勉強だけ。

*： 勉強を助けてくれるチューターはいるけど。

B： ここのチューターと一緒に暮らして、これはとてもよかったと思います。

勉強だけでなく生活を共にする友人たちと学園祭に一緒に行ったり、近隣に小旅行をしたりした

ことが留学の思い出として印象に残っている。これらの友人とは今でも連絡を取り合っており、調査時の前月、東京で元留学生のパーティをし、チューターも含め約30名が集まったという。

地域の人との交流で印象に残っているのは、同国人の小学生1名の学習支援ボランティアをしたことである。小学校からの依頼を大学を通して受けたが、同国出身の交換留学生と手分けして約6か月間授業に参加して支援を行った。

B： 実は、自分がどういう、どのくらい助けられるかわかりませんでした。行って、その子に、何か問題があるか、生活とか、勉強のことだけでもいいですので、私といろんなことを話す、話せる。それだけでも、ちょっと安心したかな。それだけ。

その後この小学生とは会ってはいないが、大丈夫だったかどうか気にかかっている。

《留学後の生活》

留学終了後1年間出身大学で勉強して、卒業した。卒業後自国で就職活動はしたが、当時付き合っていた日本人から日本で出身国の留学生の多い専門学校がスタッフを募集しているという話があり、応募して就職が決まった。卒業後約1年は実家の自営業を手伝いながら、日本語に関心のある人に日本語を教えるアルバイトをした。結婚を機に来日し、翌4月から専門学校で働き始め、約1年が経過した。

専門学校の同国人留学生は寮生活をしており、生活や勉強、アルバイト、お金の使い方などいろいろな相談を受けている。その点で自身の留学経験は今の仕事に役に立っていると思う。

B： みんなだいたい、初めて海外に来ました。いろんなことに慣れていません。だから、何かあったら私に相談に来ます。

次年度はさらに同国人留学生約20人が日本語学校での準備を終え専門学校に入学してくる予定で、現在その準備をしている。

同僚は全員日本人なので、自分の日本語能力が現在問題だと感じている。

B： もし日本で仕事があったら、自分の日本語の能力、とても大切。今私はまだまだだと思えます。

*： そうね。やっぱり会議とか、報告書とか書くのは。

B： 学生の時と働く時、全然違いますね。

*： そうですね。言葉も違うし、やっぱりそれは違うよね。

B： でも、先生たち、私の同僚にはその問題はわかっていますので、いろんなことを助けてくれます。安心してますけど、自分のこともわかっています。

*： 何が足りないかがわかっている。

B： はい。だから頑張らないといけない。

夫の仕事のこともあるので、当面は日本での生活だと思う。今の仕事は3,4年は続けたいと思っているが、将来のことはまだ何も決まっていない。自分自身の日本語能力の向上のことも考えて、大学院に進学したいという考えもある。

《留学を振り返って》

自分自身の日本留学についての評価を聞いた。

B： よくないことより、いいことのほうが多いと思います。よかった点は、自分の comfort

zone、自分のやったことのないこと、したことないことをやってみること。それはよかったです。

よくない点は単位互換がうまくできず、卒業が1年遅れたことぐらいである。やればよかったと思うことは「やっぱり勉強」で、授業にきちんと出席することである。また、サークルにも入ってみたかった。

3.2.3. Bさんの語りのまとめ

Bさんは、高校時代英語が好きで、英語である程度コミュニケーションがとれるようになったので、大学では他の言語を勉強してみたいと思い、日本語学科に進学した。日本語ができると就職に有利なことも魅力だった。自国の大学は勉強ばかりでつまらないと感じ、チャンスがあれば外国で一人暮らしをしてみたいという希望を持った。日本の大学の交換留学プログラムの中で、履修科目や寮の条件が合う大学を選び、3年次にC大学に交換留学した。

留学は便利な「テクノロジー」のおかげで、特に困ることもなくスタートした。親元を離れた生活は初めてではなかったが、一人暮らしをするのは初めてで、時間や規則などの自己管理が難しく、留学前に持っていた学習意欲は徐々に失われ、遅刻や欠席も多くなった。この点については学習環境やアルバイトのせいではなく、あくまでも自分自身の姿勢の問題であるとBさんは考えている。

自分自身は人間関係をつくるのはあまり得意ではなく、自分の「comfort zone」から出ていろいろな人と話すのにはエネルギーを要したが、自分の態度を変えることが大切だと思った。せっかく日本に来たのだから、友人をつくりいろいろな活動に参加したいと思った。幸いC大学では、勉強のサポートをするだけでなく、生活を共にして留学生の生活全般をサポートする留学生寮のチューター制度が充実していた。チューターをはじめ世界中から来た留学生たちと友人になり、学園祭や小旅行に一緒にいった。友人関係については期待以上で、今でも連絡を取り合う友人も多い。

日本でやってみたかったことの 하나가アルバイトである。自国では時給も安く経験がなかった。飲食店で材料の準備、掃除、注文、会計など全般をこなし、最初は間違いもあったが徐々に慣れていった。労働の対価として給与を得た体験は嬉しく、日本に来て「やってよかった」ことの一つである。人間関係にも恵まれ、留学終了時まで続けた。

留学全般についてのBさんの評価としては、「よくないことより、いいことのほうが多かった」という。「自分のcomfort zoneを出て、今までしたことをしたことないことをやってみる」こと、つまり、自分の態度を変え挑戦した結果得た友人関係やアルバイト経験などのことであろう。

留学中にやればよかったと思うことはやはり「勉強」で、きちんと授業に出席したかった。また、大学でしかできない体験としてサークル活動にも参加してみたかった。

帰国後1年間出身校で勉強し、卒業した。卒業後当時付き合っていた日本人の紹介で同国人留学生の多い専門学校の仕事が決まったため、就職せずに約1年間実家の手伝いや日本語の個人教授のアルバイトをした。結婚を機に来日し、翌4月より専門学校でスタッフとして働いている。寮暮らしをする同国人留学生は初めての海外生活の人も多く、Bさんは何かあったら相談にくるほど頼られる存在となっている。留学生をサポートする側になった現在、自分自身の留学経験と日本語能力がそのまま活かしていると思う。学習支援という点においては、留学中の小学生の支援経験は伏線となっているだろう。

しかし、同僚は全員日本人で会議などは大変である。同僚は大変さを理解して助けてくれるので安心だが、自分自身に何が足りないかはわかっている。学生と仕事では求められる日本語能力が異なることもわかっている。日本語力向上を含めて、大学院で勉強したいという気持ちを持っている。

日本にこのような形で戻ってくるということは留学中は思いもよらなかった。就職先も自身で探して見つけたものではない。夫の仕事の関係でしばらくは日本で生活するだろうが、将来のことはほとんど何も決まっていない。自分自身の希望としては、大学院に進みたい気持ちもあるが、これも状況によるだろう。今はすべてが未確定の状態であるが、「やったことのないことをやってみる」というチャレンジ精神で、その時その時の選択をしてきたように、今後も自ら考え、状況を捉え、選択・決定していかなければならない。

4. まとめ

本章では、2名の語りから読み取れる留学に対する評価、留学と再来日した現在の生活との関連について考察を加える。

留學生活でAさん、Bさんがまず感じたことは「自己管理の難しさ」である。Aさんは「なんとかなる」という思いだったが、アルバイトと勉学を両立させるための自己管理の難しさを痛感している。Bさんは初めての一人暮らしで時間や規則などの自己管理が難しく、留學後学習意欲を失い、授業に遅刻や欠席をするようになる。

しかし、2名にとってアルバイトは大変でも、「してよかった」「最も役にたった」経験の一つとなった。Aさんにとってアルバイトは日本社会や日本人との接触の仕方などを知り、責任感を養い、主婦としての生活にも役立つ経験になった。Bさんにとっては、労働の対価という達成感を得る初めての経験であった。

2名にとって、全体として留学は「自己成長の場」であったと言える。Bさんは、性格的に人間関係構築が苦手であったが、「自分のcomfort zoneを出て、今までしたことしたことないことをやってみる」ことによって、自分自身の姿勢を変え、多くの友人を得たことなどが肯定的な留学評価につながっている。Aさんは、奨学金がなかったからこそ、アルバイトをし、その苦勞を通して、いやだった自分の性格が変わり、「思いやり」の気持ちを持てるようになった。Aさんにとって、留学は「新しい自分になる」ような体験で「すべてに感謝」しているという。Aさんがいう、留学が「新しい自分になる」経験というのは八若(2019)のインタビュー協力者も同様の表現を使っている。1年間であっても、留学はそれまでの自分を変えるような大きなインパクトのある体験として評価されている。

2名はC大学留學中は現在のような形で再来日するとは考えていなかった。そして、再来日後2名ともに日本在住の同国人の支援する立場になった。Bさんは仕事として留學生サポートをする立場になり、Aさんは自ら考え、日本語ができずに生活が制約される同国人に日本語を教え、その子どもたちの学習支援を行っている。これらの活動には、2名の日本語能力と留學経験が十二分に活かされている。

労働力不足の解消のため外国人雇用を拡大しつつある日本において、元留學生の就職も促進されている。しかし、単なる労働力としてだけでなく、日本で生活する外国人がよりよく生活するための支援は必要であり、その支援の担い手として2名のような元留學生が重要な役割を果たしている点に着目するべきであろう。日本での生活経験があり、日本語ができる同国人ならではのサ

ポートの可能性は大きい。

八若 (2018) は、日本語専攻の学生について、日本・日本語の専門家として日本の良き理解者となるだけでなく、将来理解者となる日本語学習者を育てる人材となる可能性も持っており、交換留学プログラムはこのような人材を育てるきっかけをつくる場となるという点で意義深いプログラムだと述べている。また、本研究で示されたように、留学経験と日本語能力を自分自身はもちろんのこと、他者の日本での生活をよりよくするために活かせる人材になりうることは今後さらに着目すべき点であろう。

再来日という現在の生活は、2名ともに留学中には予想もしていないことであった。2名は来日後遭遇することにその場その場で考え、新たに選択・決定し、対応している。家族の状況によって、今後の予測はできない。本研究での2名の語りは、これからの生活においても、これまでと同様にその時その場で考え、道を切り開いていくであろうことが感じられる語りであった。

これまでの研究で示してきたように留学は人生に大きなインパクトを与える意義深い経験である。元留学生一人一人が提示する多様な意義に光を当て、丁寧に読み解いていく必要があると考える。

付記

本研究は平成29年～平成32年度科学研究費補助金基盤研究(C) (課題番号17K02839 研究代表者：八若壽美子) による研究成果の一部である。

注

- 1) ライフストーリーとは「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述の物語」であり、「個人のライフに焦点をあわせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的に読み解こうとする質的調査法の一つ」(桜井2012)である。
- 2) インタビュー項目：
 - ・留学前：留学したいと思った動機やきっかけ/どうやって日本語を学んだか/〇〇大学を選んだ理由/留学前の不安・期待していたこと
 - ・留学中：来日時の様子/期待していたこととの違い/留学生としての生活(勉学・日常生活・友人関係)/印象に残っているエピソード/先生・クラスメートとの関係/地域の人との交流/本語学習について(授業中・授業外)/自身の日本語に対する意識/日本語上達の実感
 - ・帰国後：帰国後から卒業、再来日まで/再来日の経緯/現在(日本での)生活/現在及び将来設計において留学経験が役に立ったと思うこと/日本語に対する意識/
 - ・全体：自身の日本留学経験をどう評価するか/やってよかったこと、やればよかったこと/現在の生活との関連
- 3) 要約した部分の「」は協力者の言葉を引用したものである。
- 4) 「*：」は調査者の発言。
- 5) () 内は調査者の補足。

引用文献

- 池田庸子. (2018) 「元留学生のライフストーリーにみる留学評価—研究者夫婦の場合」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』1, 45-55.
- 池田庸子. (2019) 「元日本留学生のライフストーリーにみる留学評価—交換留学から英語教育の道へ—」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』2, 47-58.
- 池田庸子・八若壽美子. (2016) 「日本で働く元留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学留学生センター紀要』14, 49-66.
- 池田庸子・八若壽美子. (2017) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—出身国の大学教員の場合—」『茨城大学留学生センター紀要』15, 13-28.
- 川上郁雄他. (2011) 「『移動するこどもたち』は大学で日本語をどのように学んでいるのか—複数言語環境で成長

- した留学生・大学生の日本語ライフストーリーをもとに」『早稲田教育評論』第25巻1号, 57-69.
- 桜井厚. (2012) 『ライフストーリー論』 弘文堂.
- 八若壽美子. (2018) 「インドネシアで働く元交換留学生のライフストーリーに見る留学評価」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 1, 29-45
- 八若壽美子. (2019) 「元留学生のライフストーリーに見る留学評価—家族と日本で生活する元留学生の場合—」『茨城大学全学教育機構論集 グローバル教育研究』 2, 29-46.
- 三代順平. (2009) 「コミュニティへの参加の実感という日本語の学び—韓国人留学生のライフストーリー調査から」『早稲田日本語教育学』 6, 1-14.
- 三代順平. (2015) 「日本語教育学としてのライフストーリーを問う」『日本語教育学としてのライフストーリー』 くろしお出版, 1-22.